

## 熊本大学学術リポジトリ

## Kumamoto University Repository System

Title	偶像の嘆
Author(s)	浅野, 正一
Citation	龍南, 175: 101-103
Issue date	1920-06-10
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/6983">http://hdl.handle.net/2298/6983</a>
Right	

## 偶像の嘆

淺野 正一

何れの劇を見ても一人又は一人以上の人物が現れて、一定の筋が運れて一の事件が完成する。泣いたり笑つたりして之を見て居た観客は靜に下りた揚幕の前でいる／＼の噂を初める。噂は何時か劇其物を離れて一般の事に及ぶ。一体私達はかくの如き劇を如何に定義したらいいか。

敘事詩が起り抒情詩が起り最後に劇詩が起つた文學史上の發展は劇の定義に或者を暗示して居る。敘事詩は事件の羅列で客觀的である。抒情詩は甲の事件と乙の事件との有機的連鎖の敘述で主觀的である。客觀と主觀とを得た吾人は次に頗る當然に此の兩者渾一の境地を求める。かくして劇詩は生れた。樗牛の擧げる所によると近松が『生玉心中』で嘉平次の台詞として

扱てたくんだ／＼。今思ひ當つた。嵐の芝居の會根崎の狂言が面白うして再々見ると吐かしたがよく見覺れた。取りもなほさず油屋の九平次。總じ

て狂言淨瑠璃は善惡人の鏡になる。己れはかた／＼の手本にするか。

と云はせて居る。樗牛はその『鏡』を文字通りの鏡に解釋して論を進めてゐる。私も出来るならさう解したい然し下の句より察するに恐らく『狂言淨瑠璃は善事とするにつけ惡事をするにつけ人の手本になる』といふ意であらう。殊に樗牛が後で近松の硯の裏面に『事取凡近。意在勸懲』と記してあつた云つて矛盾に逢著してゐるのは何んだか私の言葉に裏書して居る様だ。若し私の見解が誤らば全く近松の云ふ通りである。自然の如何なる部分を切離すも其處には主觀的及客觀的の兩意義を見出し得るから。

從て坪内博士が『義時の最期』の終りに劇を主觀描寫と客觀描寫とに區分してゐるのは頗る變だ。劇の描寫はさきに述べた劇其物の本質から云つてかく二分さるべきものではない。たゞ問題は此の兩描寫の何れに重きを置くかに在る。平等に用ゆるなどは不可能だ。

多くの人は云ふ「主觀的描寫を重せよ」と。勿論これは夢の如き空想の上に築かれる結構ではあるまい

血の滴る体験を基礎としての構想である。然し作者が近松などの様な恵まれた天才と豊かな想像力とに併せて自己の眞剣な体験とを有するならば格別、でなければ私は客観描寫を重せよと叫ぶ。豊富な過去の文献の中で私達が深い感銘を覺ゆる所其處を殆ど其儘に劇に結構したい。貧しい体験の中から立派な劇は容易く生れない。とにかく有るものを見出すことは無い物を作り出すより容易だ。そして過去の文献中に一つも卓越した劇的要素がないとは信ぜられないから。

諸君は右の如くして出来る劇を陳腐だといつてはならない我々は古きものの中にある新しき生命を見出す聰明さを持たねばならぬ。又それを「舊古の再興だ」と云つてもならぬ。舊古が舊古の殻を破るとき若しくは破らせられる時時間の制限は撤廢さるべきである。

とにかくかゝる劇の觀客は三分される。傳統的の興味に傳統的に喜ぶ人とか復活された偶像を見出す人とか、幾分かつゝ劇に引込まれる心を無理に叱咤し

つゝ叛逆の呪を揚げる人と、

昔のお芝居を呪ふ人に言ふ。我々は今や或る特殊の人に限り其の位置を轉換し得る劇中の特殊の人物の特殊の性格にのみ共鳴の聲をあげ、我々のすべてがその位置を轉換し得る劇中の人物の我々すべてが有する性格には呪の聲をあげてゐるではないか。我々は幾度か轉々として最後に勞れた足を引曳り破れた胸を抱いて後者の偶像の下に歸て來るに違ひないと私は信ずる。象牙の塔の改造の鐘はすべてにデモクラティクの響を傳へる。劇の改造丈けがアリストクラティクでは不自然だ。

日本に悲劇がないといふ人よ。御身のいふ悲劇が必然的原因に立つて悲劇なら近松の「堀河波鼓」を御覽下さい。

日本に民衆を扱つた劇がないといふ人よ。どうか默阿彌の「筆屋幸兵衛」坪内博士の「桐一葉」を御覽下さい。前者では道具に後者では主人公に用ゐられてゐます。

餘りに血の氣の多い叛逆者のために百歩を譲つていふ。どうしても御身の理性が昔のお芝居を肯定出

來ぬといふならたつた一つ。御身はそのお芝居が有する美しい水の滴る様な「詩」にもその慘逆の斧を揮ふことを躊躇せぬか。歌舞伎の衣裳が織り出す色彩に型が描く曲線に、台詞から流れる旋律に。上司も或る人の小説を批評していつた。

氏の一句くは水晶の瓶から振り出される錦の玉が瑪瑙の板を轉る様なひびきを持て居る。が此んな意味で小説を味ふのは邪道であらう然し願くは私をして暫く邪道にあらしめよと。

それでも御身は猶詩はイルージョンではない。理性の批判を待つて詩は愈々美になるといふのか。よしでは一言忠告する。御身は御身の有する美しき物の多くを失ふことを嘆いてはならぬ。キーツの詩の蛇は眞理に睨れて消えてしまつた。

最後に翻譯劇に論及する。これはあらゆる劇の形式中で最も下らぬ最も馬鹿げたものである。眼色の變つた脊の低い無格好極る外人が日本語を用ふる舞台の上に見出す矛盾さを感じる者はどうか強く感じてくれ。若しそれは今日我々が舞台の上に髪を結つた袴を見る矛盾と同じだといふものがあれば大なる誤

りである。この矛盾は時間の矛盾縦の矛盾である、我が劇を見て劇の時代に心が立ち返る時舞台と坐席とに時代の溝が撤せられる時當然此の矛盾も消へ去る。よし又劇の拙劣技能の未熟又は周圍の事情等のために此が不可能の場合にも「吾人の先祖の姿」と思へば其處に大した矛盾は感ぜぬ。之に反し前の矛盾は空間の矛盾横の矛盾で如何にも不自然で又如何にしても消滅せぬ。原作の香なんか何處を押しても出はしない。一体何の目的で此んな不便な芝居をするのか。叛逆心の氣まがくくれか又は西歐の思想で我に嘗てなく然も今日吾人に共鳴を感ぜしめるものの宣傳か何れにしても私の答は簡單である。若し前者ならば唯「御止めない」といふ。後者なら「不自由極る形式を棄て原作の香と滴りを失はぬ翻譯劇をなさい」とこれは六ヶしい然し出來なければせないまでである。とにかく翻譯劇は止めて貰ひたいのである。龍南に這入つた男が又龍南を出て行く。其處に堪へ難い淋しさがある。劇の好きな人達よ。どうかそれをもついで下さい。